

寺崎組新聞

発行所 寺崎組新聞社

木曾のゲートは強かった



この林道中、一着におしよるのはかなり大工。写真撮影は沢海氏

第46回組会報告

かなり大きな台風がこちらに向かっているらしいが当然彼女は(彼?)は組員でも、参加希望者でもないと思われる。せつかくの組会だのに何という間の悪さだろう。

空を見渡していくと、どこかに「どうよん」てな描き文字が表れそうなる。底で我々はそこに蠢く深海魚であることを思い知らされる。肌にとわりつくような空気の中、ここ岐阜県坂下駅に組長と7人の物好きが集まったのであった。

オーストラリアビクタリア州仕様のXLR組長、毎度おなじみBAJA大工、下鉄、こちらも毎度のBAJA大工、第3のBAJA監督浜島、饒舌というよりやかましいXLR赤貧森川、物静

かな青年米倉CRM、集合地までの途中でオイルを吹いたセロー沢海、私こと「ヘルメットから顔があふれている(大工談)」GS秋山が今回の面子。組新聞を読んでいてもわかるが、参加者の固定化、小数が著しい。かくいう私も1年ぶり以上の参加だが、

状況は常に変化している。今の状況も5年前からは考えにくいことだし、10年先から振り返ってみるとほんの瞬間の事かもしれないが、

集合時刻の12時過ぎ、各自「かまど屋」の弁当を腹に押し込み、しばしの食休みと集金のあと、13時半出発。が、ものの300mも走らぬうちに買出しとなる。旅先でよく見かける日本古来のスーパーコンビニエンスストアに突

も手に入れてやっぱり突然行ってしまうのであった。おさがわせました。降りそうでも降らない、もちろん降ってほしくない空の下R19を横切って手

時かな林道に向かうが1本目はすぐに行止り。四輪がたぐさん駐車してある登山口らしき広場でUターン。来る途中にあった分岐を森が深くなる方へ向かう。ごく普通の走りやすいダートを少し走ると、軽トラ十台と十台と

んという林道閉鎖3点セットに出くわすが、じーさんよりのおとがめも無くそのまま進む。道は次第に荒れガレてくる。所々コンクリート舗装のあとが残っているが石が浮いていて走りにくい。ペースは次第に落ちると言っても

私だけだが、前を走る組員が見えなくなる。私の後ろは大工と沢海氏だがペースがかなり違う様でイライラしているのがバックミラーから見とれる。少し焦ってバックミラーや風景を余裕

をすべて走り振り向け、ペースを上げようとしたら、あっさりコケた。幸い怪我も無く、単車もエンジンガードとサイドバックのおかげで大丈夫。しかし重くて引き起こせない。不様に倒れたままである。後ろの二人が助けに来てくれた。と思ったら沢海氏はそのまま通り過ぎてカメラをかまえる。う

う、プロだ。すっかり寝てしまった単車も、日頃よりプロレスで鍛えている大工に掛かるとあつという間にたたき起こされてしまう。ああ、最後尾でなくて良かった。えーみなさんすみませんでした。この場を借りてお礼申し上げます。これが今回の組会中唯一の転倒となってしまった。その後はより一層のスロー走行。

もり上がった。組長は例によって7時半には眠ってしまった、組員も一人また一人とテントの中へ。最後まで残った組員でみんなの走りの話になり、耳の痛いことを色々と言われる。大変参考になった。

5時半に起床。当然の様に組長がコーヒーを飲んでいる。みなが順次テントから出てくる。いつもの野宿の朝である。朝食を摂り、全員がテントをたたんだとたんに雨が降り始めた。何とも良いタイミング?。全員カッパを着用し下山となる。昨日あんだだけ走り

にくく感じた林道もペースを落とすとごく平和な道だった。さて、娑婆にもどろうか、としたら何とゲートが閉められ、頑丈そうな鎖と南京錠が掛けられている。ゲートの下も横も大きな石でふさがれている。さて、どうしたものか。



お中のりん

結局ヤスリ(アーミーナイフ)についているもので鎖を切ることにした。約十分程で作業は完了し、切断された鎖は全員がゲートを通ったのち、組長の針金で再度つなぎ直しておく。作業は私と組長の二人ばかりでみんな遠巻きに見てるだけだった。もし管理人がや

って来た時に他人を装うつもりなのか?それとも「鎖を切ったのはあの二人の独断で僕らは止めたんですよ」とでも言うのか?考えすぎだな。

その後は何らトラブルもなく雨の中皆三々五々帰路についた。南に向かった組員は台風の暴風雨圏へ突っ込むことになりなかなかスリリングな締めくくりになったようだ。

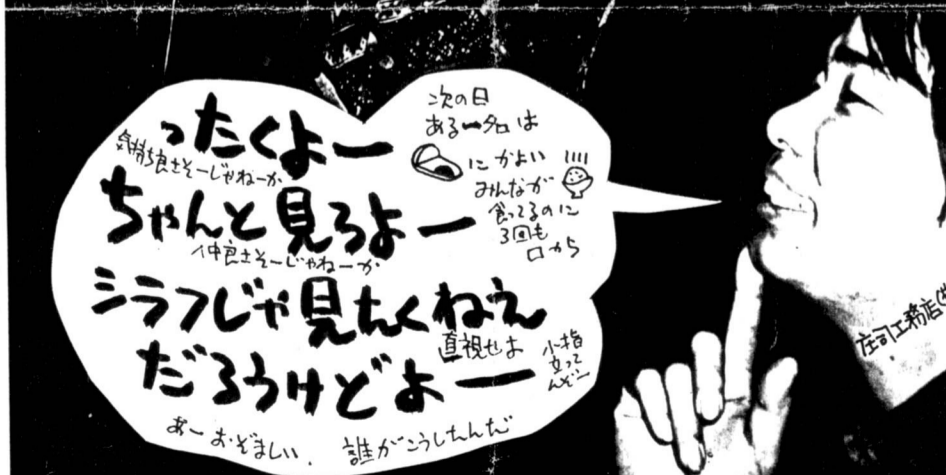
記 カバ秋山

今日のメンバー

右はあさひの上野原「道」にて撮る沢海
左はあさひのロサンゼルス空港にて



海外旅行好き 日本人の典型スタイル
一仕事の日 沢海氏



TWへの道 最終回

ポールペンでパーパッドのカバーに手書きするトリップメモターは、そのままデータ保存されて便利だ。約7.5リットルのタンクだが、例え大容量でもいずれば給油せねばならぬ好燃費のTWに満タンからエコーラッパせれば、三百キロ弱は走行可能ではないのだろうか? たぶん。無理かな?? 乗り手にやさしいマイルドなエンジン。その控え目なフィードバックはいい感じさ。おしさえ感じさせられる。

真の暗闇の中ならば充分と云えるライト光量。本当の真つ暗闇ならぬ急ブレーキングにも減速に止まらぬNALBシステム(NIIマシヤ)ブレーキオイル交換に煩わされる事もなく、ディスクカパーも不要。

87年春の発売時で既に完成し尽くされまくっていたTWには、仕様変更も改造も全くその必要がないのである。(しかし純正キヤリアが重量3kg以上だとは思ってないかった; どうする?)

二輪車に必要な不可欠な三要素、即ち安い・太い・遅い」を全て網羅するTWを得て、人類はその進歩と発展を完了したと云わざるを得ないのか!! : 否!! これから始まるのだ。 TWに人占みなし!! (弱点は多いのだけれどもね。)

24号 やな

THE 55便
55の...
55の...
55の...



六、温泉
200キロの悪路を走り続けた。石と埃だけの道だ。道はアツブダウンを繰り返して、曲がりくねっていた。木の無い緑の丘から丘へ、薄茶色の谷から谷へと道は続いていた。

道は、平行して何本もあった。タイヤで削られ、掘られて道は荒れてゆく。少しでも平らな場所を選んで車は走り、その隣に道が出来る。その隣にまた道が出来、何本もの道が出来上がる。通る車が多い「道なり」という感覚と、方向感覚だけが頼りだ。

道は、どんなに長くても、水と食料のある集落から集落へと通じている。そして現代ではガソリンでもある。それがなくては生きられない人間。

道の向こうには、そんな弱い人間の姿が見えてくる。

私は、そんな弱い人間の一人である。旅をする人間にとって、もっとも重要なだと思われ、そんな感覚を蘇らせてくれるモンゴルの道である。

パンホンの町に近づく、道は良くなる。とはいっても、何本もあつた道を一本にたばねて整地してあるだけだ。町近くの川沿いの道は、ごろごろの石だらけで川原を走っているのと同じだった。川沿いに立つ黄緑色の柳の林が、とても新鮮に写る。

橋を渡る。たつぷりと流れる透明な水に目が潤う。橋の上にピカピカのサイドカーが止まっていた。旧ソ連製である。

普通のズボンとシャツを着たモンゴル人の男が二人、そして厚化粧の女。

月井 オーキャンサー 塚村 同音

組長の「オーキャン」連載も二年目を向かえ、だんだん付き合ってくれ、一般人もいなくなってきたと見えて、とうとう小生にお声が掛かってしまった。

今回のテーマは「まともなテントを使わない野宿」という事なのだが、仲々いいアイデアも浮かばず、とりあえずでかいドカシーとロープをダットラ号に押し込んでおく。さて、3連休となった11月3日、まずは上野原の沢海邸に集合。集まった面子は、地下鉄、北脇、沢海氏の友人小室氏。明日の取材に備えて綿密に打合せを行なう。はずだったのだが、何かスナック「道」にくり出してしまった。

明けて4日、沢海氏が二日酔いでダウンしてしまつたので、出発はほとんど正午。秋山村周辺の林道を突っつきまわすが、Uターンの嵐。大汗かきながらダットラを引っくり返す。

雛鶴峠を越えてたところで懲りずに林道に入っていくが、道はカレカレ、自衛隊車庫部隊を先行させて砂防ダムの下に野宿地の所在を確認。だがこれからは小室氏のE&Aでは前進不能。止む無くその場にE&Aを放棄、小室氏を大工の軽トラックに無事到着。まずは軽く乾杯し、それぞれ今宵の寝ぐらの設置に入る。大工は暇にまかせて下ごしらえしてきた材料を持ち出し、いきなり小屋を建て始める。とにかく立派。そこらのキャンプ場のバンガローよりずっと立派である。小生は仕方無いのでダットラの鳥居を利用してドカシーをかける。まあこの季節、虫もいないし、トノカバもかければ二重ファイヤーになるので支障あるまい。

組長はランクルに積んで来た木っ端を三角に組み、みんなのドカシーをかき集めてテントを組み上げる。北脇は昔「バックオフ」で組長が使ったような寝床ドカシーテントを張らされる羽目になる。

さて陽は沈んだし、寝ぐらは出来た

ある林道奥に突然出現した山神様の祠風バンガロー

し、沢海氏は二日酔いから立ち直れず酒を飲んでいないので、珍しく(?)仕事をしている。あとは鍋を囲んで飲む飲む食う食う。

陽の高い内から飲んでいたせい、昨日の「道」のママのたたりか22時過ぎには全員ダウン。平和な夜となった。因みに北脇は組長特製のドカシーテントから逃げ出し、大工の小屋に避難して寝たらしい。

明けて5日、いい天気。組長から第二の課題「缶詰めを使って気の効いた料理を作る」が出される。北脇はコンビーフ炊き込みご飯。大工はツナチャーハン。地下鉄はマグロフレークサラダ。小生は牛肉大和煮入り玉子丼。組長はサバミソ入り味噌汁をそれぞれ仕上げる。意外にも皆そこそこの味に仕上がっており、とんでも無くまずいものを期待していた組長をがっかりさせる。んな訳で無事朝飯も終わる。

つつが無く取材が終わった。さて今度の記事でも「通りがかりの人」たくさん出て来そうだなあ。

PS.その後大工は塩の上に一泊し、翌日サイクルフィールドの取材にまで付き合うのでした。

記 勉

匠技は痛い。(株)庄司工務店
家がバカローまでお任せ下さい

03(3762)9319

カマテリアスナック
ごまごまり

今夜もあたたかくなります

11月5日、沢海邸にまたお会いしてバンガローの取材をすまじりに格上をされた。とか評判の高かたから料理は評判通りだと感銘のお持ちのていく。猫に技をかけた感じだったのでした。



さて、TW組の集会の解散後も独りツリーリンクを繞行、岐阜県へ進入した柳沢は6日夕刻、金山町の林道行止りに野宿。7日は郡上八幡、御母衣、白川郷と廻って、河合村の林道行止りで野宿。8日は飛騨高山へ寄り、木曾福島へとおもったら崖崩れで通行止め。天気も良く、高山から安房峠を越えて気持ち良く走ったから松本へ出てしまった。もう午後、さあ何処へ?と思ったが邪心が沸いた。松本から甲府南まで高速、富士川沿いに南下、山梨県は某H川町某S之上へ侵入、もう日暮れ刻であった。もしも御留守であれば庭先に無断テント泊させていたたくつもりで、寺崎組長邸をお訪ねした。恐れ多くも一介の組員が、しかもアボ無しで押しかける前代未聞言語道断迷惑千萬下克上お宅訪問となった。

閑静な高級山奥地の専用道路を進むと、広大な農場に抱かれるかのやうに寺崎御殿はたたずんでいたのだ。かくて突然の汚ない乱入者をモク、らも、そして組長殿の御三方は洪々と迎えてくださり、柳沢は二連泊。

10日早朝、組長と国分寺E&Gまで同行させていただき、E&Gに一泊。

11日朝「春よ来い」を観終わって、野宿集場地の滝沢村へ向けて出発される組長、沢海さん、林さんをお見送りしてからの帰途、盛和荘須藤部屋へまた乱入、そうめんを御馳走になって今回の旅の締めくくりとさせていた。組長、奥様、モク君、須藤さん：迷惑をおかけしました。ありがとうございます。

24号 やな

電車 の 事故

先日銚子電鉄で正面衝突事故がおきた。原因、同鉄道は単線で対行電車が駅に入線してから出発しなければならぬものを、信号を見落として駅を出てしまったため。駅を出て直ぐだったのと、もともとスピードがとんでも遅いため信楽鉄道のような大惨事ならなかった。

ちなみにぶつかつた電車の片方は営団地下鉄銀座線を走っていたもので、銚子電鉄を昔から走っている車両を潰してしまふくらい丈夫だった。

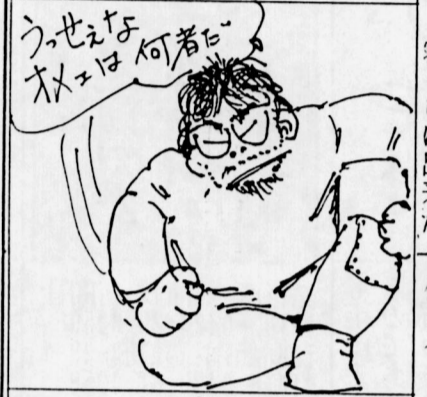
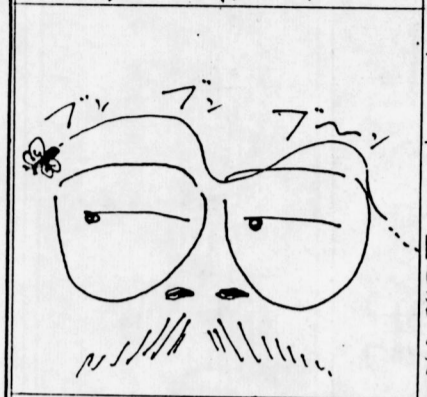
＊銚子電鉄：JR銚子から外川(とかわ)結ぶ6km余りの小さな鉄道です。九十九里鉄道のようにつぶれずに残っていることが素晴らしい。また、NHKの朝の連ドラ「濡つくし」をやっているところは、たんなる貨車に天幕張つただけの車両を「濡つくし号」とか呼んで結構盛り上がったものでした。

またも今更スカーン

右・寺崎家 塚村 沢海
左・国分寺に辻斬り現る新しき様

「寺崎組新聞」の定期購読料の告知

この新聞は年六回の発行を予定しております。年間購読料は二千元以上です。購読希望の方は何らかの方法(現金書留・郵便振替・普通封筒に入れて等)で送っていただければ幸いです。この新聞を永続させるためにも原稿とともにも新聞制作のお手伝いにも来ていただければ幸いです。



またも今更スカーン

右・寺崎家 塚村 沢海
左・国分寺に辻斬り現る新しき様



またも今更スカーン

右・寺崎家 塚村 沢海
左・国分寺に辻斬り現る新しき様